

COG2025 応募内容確認書

ID	4-2-2
自治体名	山形県鶴岡市
自治体提示地域課題	すんでみたいかも鶴岡市 移住者を呼び込む仕組づくり
チーム名	大東文化大学・阿部ゼミ
アイデア名	「灯りの継承者（Light Inheritors）」プロジェクト 移住者が地域の冬の物語を“引き継ぎ、更新する”
チーム属性	混成：市民と学生（ ）の混成チーム
チームメンバー数	4
代表者	小林 万紋
メンバー（公開）	小林 万紋, 羽鳥 彩

【確認事項】

- < 応募のPDFファイル名と送付先 > 確認しました。
- < 応募内容の公開 > 確認しました。
- < 知的所有権・肖像権 > 確認しました。問題ありません。

自治体提示の 地域課題名	自治体提示の地域課題名	自治体名
	すんでみたいかも鶴岡市 移住者を呼び込む仕組づくり	山形県鶴岡市
チームがつけたアイデア名	「灯りの継承者（Light Inheritors）」プロジェクト —移住者が地域の冬の物語を“引き継ぎ、更新する”—	

鶴岡市における移住に関する課題

鶴岡市は、**2025年版「住みたい田舎ベストランキング」総合部門第5位（宝島社『田舎暮らしの本』）**に選ばれた。令和6年度は市の移住相談窓口を利用した方の内、86世帯・146人が鶴岡市に移住している。

しかし、鶴岡市は移住先として高い評価を受けているが、**実際に住み始めた人からは「地域にどう関わればいいのかわからない」という声も聞かれる。**このことは、各種移住調査においても、移住希望者が抱える不安の上位には「地域に溶け込めるか」「人間関係を築けるか」が挙げられている。制度や支援策の情報だけでは、**実際の暮らしや地域との関わり方を具体的に想像することが難しく、移住後の定着が課題となっている。**

アイデアの全体像

鶴岡市藤島地域は、「**歴史公園×市民主体イベント×移住者が可視化される余白×首都圏大学との継続関係**」が同時に成立している、**全国でも極めて稀な地域である。**

本アイデアは、鶴岡市藤島地域の冬の風物詩として定着している「**Hisu 花イルミネーション**」を舞台に、**移住者を“灯りの継承者”として迎え入れる社会活動である。**本企画では、この「成長し続ける物語」に移住者が途中参加するのではなく、**次の章を担う存在として関わる仕組みをつくる。**移住者を「支援される側」として受け入れるだけでは、地域との関係は一方方向になりがちである。そのため、**具体的な役割を持ち、地域の人々とともに一つの成果をつくり上げる経験は、心理的な定着を促し、「この地域の一員である」という実感を生み出すものである。**

藤島歴史公園「Hisu 花」ワークショップ

藤島歴史公園「Hisu 花」ワークショップ（メンバー37名）は、**藤島地域にある歴史公園の活用として、市民有志を中心に、中学生・高校生、地元企業、大学生などが世代を超えて協働し、6,000個の電球から始まり現在では約16万個の灯りをともしイベントへと成長してきた。**

- 2015年に、町のシンボルとして藤島歴史公園（愛称・Hisu 花）は開園、藤島地域の中心部に大藤棚や藤のトンネルなど、藤島地域のシンボルである“藤の花”を堪能できるスポットとして誕生した。
- 「Hisu 花」という愛称は、“History（歴史）” “Utopia（理想郷）” “藤の花”の3つのキーワードを掛け合わせたもので、「歴史と花があふれるユートピアのような公園にしたい」という想いから名付けられた。
- 2018年、本格的にHisu 花を盛り上げて行くため、旧藤島町の人を中心とした市民ワークショップが立ち上がる。
- 2022年より、大東文化大学阿部ゼミが、ワークショップメンバーに正式に加入して、地域住民とともに、点灯式イベント「Hisu 花 de ないと」などの企画・立案などにかかわる。2025年はテーマ企画を担当した。
- 2025年に、これまでの活動が評価され、**「市制施行20周年特別感謝状」を表彰された。**

移住者を「迎えられる側」ではなく、「地域の冬をともにつくる側」として位置づけ、初めて関わる移住者が、誰と、どのように地域と関係を築くのかを丁寧に設計することで、不安を期待へと変える体験を提供する。

<ねらい> 藤島歴史公園 Hisu 花からの地域づくりへの挑戦

**Hisu 花は、回を重ねるごとに規模を拡大しながらも、市民主体の協働体制を維持してきた稀有な事例。
イルミネーションという「成果が目に見える活動」でありながら、準備過程では対話や試行錯誤が
積み重ねられている点に、移住者受け入れの可能性がある**

年	内容
2018年	<ul style="list-style-type: none"> ・「Hisu 花活用ワークショップ」が発足（メンバー20名）。歴史公園の利活用を検討、3回のワークショップ+3回の延長線ワークショップ開催。 ・大東文化大学・阿部英之助先生が、ワークショップファシリテーターとしてかかわる。 ・「鶴岡市地域まちづくり未来事業」を活用し、13万3,000個の電球を用意し、イルミネーションイベントを開催する。 ・点灯式を「Hisu 花 de ないと」というマルシェを組み合わせ開催、5,000人が来場 ・大東文化大学・阿部ゼミ生がイベントスタッフとして、ボランティア参加する。
2019年	<ul style="list-style-type: none"> ・「Hisu 花 de ないと」の第1部に音楽フェスを開催。点灯期間を11月から1月に。 ・点灯期間中の来場者：20,100人（72日間・日平均279人）
2020年	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため「Hisu 花 de ないと」を中止 ・『藤島イルミネーションを庄内No.1→山形No.1にする!』缶バッチプロジェクト開始 ・InstagramとYouTubeアカウント開設。点灯式の模様をインスタライブで生配信 ・点灯期間中の来場者：22,000人（70日間・平均314人）
2021年	<ul style="list-style-type: none"> ・「Hisu 花活用ワークショップ」に新メンバーが10名加入し、25名となる。 ・昨年同様、「Hisu 花 de ないと」を中止し、生配信を行う。テーマ“星に願いを” ・庄内農業高校に、「庄農コーナー」を設け、イルミネーションを担当 ・インスタ投稿数139回（今年度70回）、フォロワー数1,589人 ・点灯期間中の来場者は、27,000人（69日間・平均394人）
2022年	<ul style="list-style-type: none"> ・「Hisu 花 de ないと」を3年ぶりに開催。「音楽フェス」も同時開催、15万球。 ・テーマ“遊べるイルミ”「あそべるコーナー」として、イエローコースターなどを設置 ・ワークショップメンバーに、阿部ゼミ生が正式に参加し、SNS、ふるまいを担当。 ・東田川文化記念館の壁面を活用したプロジェクションマッピングの実施 ・インスタ投稿数226回（今年度88回）、フォロワー数1,904人 ・「#Hisu 花」でタグ付けされた投稿はInstagramだけで、1,600件 ・点灯期間中の来場者は、26,000人（68日間・平均382人）
2023年	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回点灯式に降られる雨を味方につけようとテーマを「フジ・アメ」 ・点灯式の来場者は5,500人、フォロワー数2,139人
2024年	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマは、「チル♡フジ」 点灯式の来場者は、過去最高の6,500人、フォロワー数2,436人、点灯期間中は、28,500人（2024年11月3日～2025年1月13日）
2025年	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマは、「星にねがいを」<大東文化大学・阿部ゼミがテーマ企画を行う>

「灯りの継承者 (Light Inheritors) 」プロジェクト

灯りの継承者としての移住者

- 移住者を「参加者」や「手伝い手」としない
- 地域文化を一時的に預かり、更新する存在として位置づけ
- 灯りは毎年消えるが、物語は次の年へと引き継がれる
- 移住者がその一部を担うことで、「自分はこの地域の歴史の続きを生きている」という実感が生まれる

大東文化大学・阿部ゼミの役割

- 「手伝う学生」ではない。
- 地域共創エディター (Co-Creation Editor) としての役割
- 地域を“外から評価する”のではなく、“中から言語化できる”存在

「藤島イルミネーション」という成長し続ける物語に移住者が、次の章を担って関わる仕組み

2026年

● Hisu 花ワークショップの企画・制作・運営プロセスに、移住者を正式メンバーとして組み込む

● 鶴岡市への移住希望者および移住後数年以内の移住者

● 市民有志のワークショップを中心に、地域の中高生、地元企業、大東文化大学の学生、移住者が共創する。

● 移住者は「灯りの継承者」として、特定の演出・展示・制作班を担当し、その背景にある想いや経験を物語として可視化する。完成した灯りには“誰が、どんな想いで関わったか”で紐づけられる。 <参加を通じて、自身の気づきを言葉として残す仕組み>

● 移住者が行う具体的な企画内容 <Hisu 花を“更新する存在”として、毎年 1 つだけ役割を与える>

● 「Hisu 花・よそ者編集局」

— 移住者が、藤島と Hisu 花を“外の言葉”で再編集する —

● 「移住者イルミネーション「1 灯 1 ストーリー」」

— 移住者 1 人につき 1 つの灯りを担当

その灯りに「なぜ鶴岡に来たか」、「藤島で驚いたこと」、「残したい風景」を短文で紐づける

● 「はじめての藤島」フィールドノート内容

移住者が Hisu 花準備～本番まで参加、その中で感じた、戸惑い、暗黙のルール、優しさ、排他性、を日記・写真・一言メモで記録

● 移住者は Hisu 花に「参加する人」ではなく、**地域を更新するための「視点を持ち込む存在」と位置づける。**

移住者自身が語るリアルな動機/離脱する理由である「人間関係の見えない壁」の可視化・言語化

活動の様子



6/21 第1回WS



第3回Hisu花ワークショップ

9/11 第3回WS (大東大生も参加)



10/26イルミ設置作業



庄農イルミ (庄農生製作風景)



看板リニューアル (藤中Ben's)

令和6年度のイルミネーションの特徴

Hisu花deないと2024 2年続けての晴天🌞の中開催!!



第1部 (昼の部) 音楽フェス

第2部 (夜の部) 点灯式

みんなで踊ろうtime



クラフトエリア

大東大エリア

大抽選会

令和6年度のイルミネーションの特徴

テーマに沿ったイルミネーションの展開
「チル♥フジ」



ネオンステージ

ネオンアーチ

ネオントンネル



ボール&ネットイルミ

大藤棚

(真の愛情を広げて設置)

藤島歴史公園「Hisu 花」× 移住者 × 大東文化大学

— よそ者の視点で地域を更新する共創モデル —

「コンセプト」初めて鶴岡の冬を迎えた移住者が、氷点下の公園で、地元の中학생と並んで灯りを取り付ける。
点灯の瞬間、その灯りは「今年の展示」だが、その人にとっては「この地域で最初の居場所」になる。

●実施主体：「Hisu 花」ワークショップ <地域住民+大東文化大学・阿部ゼミによる混成チーム>

連携する組織

- 大東文化大学社会学部・阿部ゼミ
- 鶴岡市立藤島中学校
- 藤島地域青少年ボランティアサークル Ben'S
- 山形県立庄内農業高校
- 地元・藤島地域以外の鶴岡市内関連企業

地域による協賛金・クラウドファンディング

- 「Hisu 花 de ないと 2025」は、87 団体による協賛で 97 万円の実績
- 缶バッジ募金 <100 円でイルミ 1 球増>
- 地元・ロータリークラブからの支援の活用
- 新たにクラウドファンディングの活用

Hisu 花ワークショップの役割

- ・イルミネーション全体の企画・設営・運営
- ・安全管理、会場調整、当日イベント企画
- ・地域住民・企業との調整
- ・移住者の受け入れ（既存作業に同席するだけ）

地域の中学生・高校生の役割

- ・移住者へのインタビュー
- ・ストーリーの編集補助
- ・展示・SNS 用コメント作成
- <地域外の視点に触れる学習/学びの場へ>

移住者の役割

- ・想定人数：1～5 名
- ・Hisu 花準備・運営への部分参加（可能な範囲）
- ① 1 灯 1 ストーリーの作成、
- ② フィールドノートの記録
- ③ 改善提案 1 件の提出
- オンライン参加・短期参加も可
- <「作業要員」ではなく「視点提供」が役割>

大東文化大学の役割

- ・移住者の語り・記録を定性データとして整理
- ・「移住理由」「不安」「定着要因」を分類・可視化
- ・1 灯 1 ストーリーの展示設計
- ・図解・パネル・ZINE 制作
- ・Instagram・Web での発信設計
- ・年度ごとの変化をアーカイブ化
- <3D = Data・Design・Digital を担当>

鶴岡市の役割 <行政>

- ・移住者募集・マッチング支援
- ・情報発信の後方支援
- ・継続実施の制度的保証
- ・場を保証する役割

「灯りの継承者（Light Inheritors）」プロジェクトもたらす特徴と効果

- ・新たな人材や大規模予算を必要とせず、既存の市民活動に「役割・視点・編集」を重ねることで実現可能。
- ・移住者を「支援される側」に留めず、**地域を更新する当事者として位置づける点に本企画の新規性**がある。

移住者への効果 ～「不安な新参者」から「語れる当事者」へ～

- ・移住初期に感じやすい「地域にどう入ればいいかわからない」不安を軽減
 - ・役割を持って関われることで、参加の理由と居場所を同時に獲得
 - ・自らの言葉が展示・記録として残ることで、地域との心理的距離が縮まる
- ⇒**定着率向上・早期離脱の防止**

地域住民にとっての効果 ～「守る側」から「更新する側」へ～

- ・移住者の率直な視点に触れることで、自分たちの地域資源を再発見
 - ・暗黙のルールや課題が可視化され、次世代に引き継ぐべき点が明確になる
 - ・世代・立場を越えた協働により、地域内の対話が活性化
- ⇒**内向き化の防止・持続的市民活動の強化**

若者・学生にとっての効果 ～「手伝い」から「編集者・記録者」へ～

- ・中高生は、移住者との対話を通じて多様な生き方・働き方に触れる
 - ・大学生は、実社会でデータ整理・編集・発信を実践
 - ・学びが地域課題解決と直結する体験に
- ⇒**地域に関わる人材の裾野拡大**

鶴岡市にとっての効果 ～「支援策」から「関係構築モデル」へ～

- ・数値では測りにくい「なぜ鶴岡が選ばれたのか」を定性データとして蓄積
 - ・移住施策をイベント単発で終わらせず、市民活動と接続した循環型モデルとして構築
- ⇒**「鶴岡でしかできない移住モデル」の確立**

社会全体への波及効果 ～移住を「個人の決断」から「地域のプロジェクト」へ～

- ・移住者を「受け入れる／支援する」構図を超え、共につくる関係性を提示、
- ・地方創生における、新しい参加型ガバナンスのモデルケースとなるが、起点は鶴岡でしか成立しない

移住者を増やすのではなく、新しく来た人の言葉が、次の鶴岡を少しずつ形づくっていくための仕組みづくり
16万個の灯りの中に、新しくこのまちを選んだ人の想いが一つずつ宿る
その風景こそが、鶴岡の未来である